

あり山の形は文のこゝに誰人か龍の三重、
中に巻く山形ありてその下に崖建つりと
いふ。へき万人の目より見るたゞ荒崖の險阻
を見る斗之龍龍の年々一笑をへき事なり
小寺氏元因相後附録はけ山の形富士に似
たりと云くを方より見れを似たりといふ
一西方につくも峯なくハ能く似たりといふ
一巖屋の字匠を龍院寺と稱するハ明暦
以後の事もやお件の極龍文の記といふ觀者
寺とあり

多海山の号玉史より見たり。和後記より多海
山大明神と出づ板中に此の始なり。三代
實録より飽海郡山上と斗ありそ云曰貞觀
十三年夏五月十六日辛酉先是出羽国
司言從三位勲五等大物忌神社在飽海
郡山上巖石壁立人疏稀到夏冬載雪禿
無草木去四月八日山上有火燒土石又
有聲如雷自山所出之河泥水溢其色青
黑臭氣充滿人不堪聞死魚多浮擁塞不
流有兩大地長十許丈相流出入於海口